

日向晶也LV1

@silky

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも、明日香と10年来のメル友だったら。

もしも、みさきが因縁と分かりながら中学の頃に再会していたら。

そんなIFから始まるバタフライエフェクトが物語を大きく変質させる。

具体的に言うくと、順調にコーチングしていたら、ヒロインたちが個別ルートに入っただけの話である。

しかし、『あおかな』にハーレムルートは用意されていない。

やがて修羅場へと発展した時、少女たちは見知らぬ記憶を思い出して――。

これは、原作と違った道を進んだ晶也が紡ぐ、可能性の物語である。

※現在、蒼の彼方のフォーリズムが、iOS／Androidより個別ルート直前、第6話まで無料配信中です（第7話＝最終話）。原作未読であれば、そちらを先にプレイしていただくことを推奨します。また、アニメも参照にしていますので是非そちらの方も視聴してもらえたらと思います。

【特報】sprite復活するつてよ

Zweiの可能性が出てきたのでみんなで公式Twitterを見て応援しましょう！あの、Zweiが発表された時の高揚と、Zweiやみさき続編が中止された時の絶望を思い出せ！

【吉報】extra2 きたあー!!

2022/03/25に発売予定らしい！

専用の公式ホームページ出来てるし、あの謎に満ちた覆面選手の正体がgalleryのCGについて明らかに(´▽｀)!!新規CGや情報が色々あつて感無量です。spriteバンザイ!!

しかもしかも、ifまで出るそうで、皆さんお待ちかねのあの子がヒロインに昇格するかもしれない作品まで出てくるそうでもう、ワクワクが止まらないですね！

いや、本当に良かった。あおかな知らない人は今からでも遅くないし、プレイしてか

ら時間が経っている人ももう一回プレイして高揚感を体験しましょう。超おすすめで
す。

目次

第1章

メル友、倉科明日香	1	砂浜の再会―1/2	58
空飛ぶ願い	11	砂浜の再会―2/2	68
詰めの甘さ	21	完結記念！ すかすか設定資料大公開！	
フレンドシップ	27	設定資料	76
エターナルフォースブリザード			
35 間違え少年と集結フォーリズム			
42 ナイストゥーミートゥー○NEW			
51 番外編			

第1章

メル友、倉科明日香

「そろそろ、行かなきゃ」

「ああ、じゃあ元気で」

「……ぐすっ」

「おい、泣くなよ。さっき言ったろ、そういうのはナシだつて」

「でも……」

「しょうがないな……ちよつと待ってて」

「えっ？」

「はあっ、はあっ……ほら、これ」

「これ……なあに？」

「俺が大切にしてるやつ」

「これ……いいの？」

「そうだよ、これがあれば何処にでも飛んでいけるんだ。宇宙までも」

「飛んで、いける」

「だからこの先お前が一人でどうしようもなくなったら、その時は、これをぎゅつとして、お願いしろ。空に向かつてな」

「空に向かつて、お願い……………」

「そしたら飛んでつて助けてやるから」

「ほ、ホントに？」

「おう、絶対にだ！ なにせ空はどこへだつてつながっているからな」

「……………」
「ありがとう。じゃあ、これ大切にする！」

「ああ、じゃあな——明日香！」

？≡

「はあつ、はあつ、はあつ……………」

その日、俺は朝から全速力で通学路を走っていた。

「くつそ、間に合うかな……………」

ポケットから出したスマホで、今現在の時間を確認する。

「7時55分……………」
「ギリギリか……………」

時計は残酷なまでに現在時刻を示している。

再びポケットに現実をしまいこむと、俺は必死に両足を交互に前に出し、先を急いだ。「だいたいアレだ、あんな夢見るからいけないんだ。あんな内容じゃ、寝つきも……」

一人でブツブツ自意識に文句をつけていると、

「あれ、何してるんだ、あの子」

一心不乱に駆けていた道路の先に、女の子が一人、這いつくばっていたのだった。

「シヨックです……困りました。このままだと家に入れません。なんで転校して初日に鍵を落とすとか信じられない、やっちゃいました……」

わざとやってるのか？ と疑われるほどに、元氣よく自らの境遇を一人で語っている。

状況を聞く限り、それなりに大変な状況のはずなんだが、あの無闇な明るさはなんなんだろうか。

何をしてるんだかと思いつながら、女の子の横をすり抜ける。

約束までもう時間がないが、むしろその約束自体が意味のないものとなってしまうた。

というわけで、俺は銀の物体を拾って道路を這う女の子に声をかけた。

「もしもし、そこのお嬢さん」

「えっ？ あ、はいっ」

俺がナンパ男みたいに声をかけると、女の子は這った状態から立ち上がり、シャキッと『気をつけ』の姿勢でこちらを向いた。

「な、なんででしょうか？」

その顔を見て、ちよつと息を飲んだ。

大きく見開いた目と、その下にバランスよく配置された小さな鼻と口。

……可愛かった。ちよつと、見とれてしまうほどに。

「あ、あの……？」

女の子の言葉に、我に帰る。怯えが見え隠れしていて、何か誤解があることを悟った。

「あ、えっと、困ってみたいだから。探してた鍵ってこれかな？」

彼女の目の前にホルダーも何も付いていない、素の状態の鍵を差し出した。

「あ……ああっ！」

声が上がると同時に、女の子の両手が俺の手ごと、鍵を包み込んだ。

「ありがとうございます！ こ、これですっ！ 家の鍵ですっ、すごいです！ あの、どうやって見つけたんですか?! それになんで探してたのが鍵だってわかったんですか？」

「いや、たまたま偶然に目に入ったからで、別にすごくもなんともし」

「そんな、謙遜なんかしないでください。はあく、やっぱり島の人ですね、親切ですね！」

仇州は人情の国やけん、心配せんでよかよ、つておばさんが言つてた通りでした!!
仇州男児、つて言うんですかね、なんかこういうの、憧れます、カッコいいです！」

憧れとかかっこいいのハードルが下がりすぎだろ。

「ありがとうございます、恩人ですつ！ えつと……あの……」

ようやく女の子の一人語りも終えたみたいで、お礼を言おうと、名前を聞きたがつて
いる様子を見せた。

もちろん名乗るつもりだがその前に、

「あの、さ」

「はいっ、なんでしよう！」

「いや、あの……手」

「はい？」

そこでようやく、女の子は自分の手をじつと見つめる。

面白いぐらいに、その顔色はキューッと赤くなると、

「うわわっ！」

パツと手を離し、ペコペコと頭を下げた。

「ごめんなさいごめんなさい！ 私つたら今日初めて会つて名前も知らない人の手

を握ったりして、もうとてもすみません！」

頭を下げつつ、自分への罰のつもりなのか、ぺちぺちと頬を叩いたりしている。

「はあく、もう、なんでわたしこういう時に勢い余ってやってしまうんだろう……」

「や、別にそれは気にしなくていい……それよりも」

俺は意地悪な笑みを浮かべて女の子に告げた。

「今日初めて会ったなんて心外だな、明日香」

「えっ、え？ ……えええええええっ?!」

パチクリと目を瞬かせた女の子、倉科明日香は、まじまじと俺の顔を改めて見つめると、ようやく俺の顔を思い出したらしく、

「も、もしかして、まま、まーちゃんですか?!」

まーちゃん、それは昔から明日香が俺、日向晶也を呼ぶ時に使うあだ名だった。

「そ。小さい頃からずっとメール相手だったまーちゃんだよ。今日も停留所で会う約束してただろう？」

「でで、でも！ ま、まーちゃんがお、男の子だったなんて……っ。確にかっこいい女の子だな、なんて思っていましたけど……」

「あー、やっぱり明日香は勘違いしてたのか」

メールをしていて、そうなのかな、ということとは時折あった。

まあ、俺もあえて指摘はしなかったが。

「まさか王子様がお姫様かと思つたら王子様で……ああつ、もう頭がパンクしそうです……」

小さい頃の俺は、髪を伸ばしていた。だからよく女の子と間違われることもあり、なんだかこの反応が懐かしい。

「まあ、その辺はおいおい慣れてくれたらいいよ。それより学校に行こうか。通うのは明日からだけど、まだ手続きとかが残ってるんだろ？」

「はい。なので今日は学校までの案内よろしくお願いします、まーちゃん」

妙にまーちゃん呼びがくすぐったい。メールだとあまり気にしなかったけど、もしみさきたちに聞かれたら面倒なことになりそうだ。

だけど、恥ずかしいからと言って呼び方を変えさせるのも子供っぽいし、これはこれで新鮮な感じがいいと思う。

チラつとスマホで時間を確認する。

8時10分。まだまだ余裕がある。

これなら歩いても遅刻しないが、せっかく久奈浜に転校してきたのだから特別な体験をさせてあげたかった。

「んじゃ、そっから行こうか」

停留所を指さし、言った。

「え、そこからって何もありませんけど……バスでも来るんですか？」

明日香は目をパチパチさせながら、首を傾げた。

「違う違う。グラシユのことはもう聞いている？」

「ぐら……しゅ……。あ、これのことですか？ だいたいのは聞いてますが、実はまいちよく分かってなくて」

履いている学校指定の靴を指さし、答える明日香。

「そうこれ。使ったことはないよね？」

「まだ無いですけど、あの、一体何を？」

「じゃあ、俺がサポートするから行こうか」

「えっ？ あ、あのっ」

「本当は先に講習してあげたほうがいいんだけど、ペアリングで飛ぶから安心して」
明日香を先導して、停留所へと向かう。

「周りは……大丈夫だな」

念のため、飛行通路を確認し、周囲の様子を目視する。

「飛行禁止のランプも点いていない。じゃあ次は、靴の確認だ。明日香」

「は、はいっ」

「靴、履いたままでいいから、ちよつと片方を前に突き出してみて」

「はい、こうですか……?」

差し出された靴の周囲を、こちらも目視で確認する。

「よし、異常なし。じゃあ反対側も」

同じく、もう片方の靴も確認する。

「はい、OK。じゃあちよつと深呼吸してみようか、すつてみて」

「深呼吸、ですか、はい、すう~~~~~つ……」

「じゃ、はいて」

「はあ~~~~~つ……」

「はい、んじや行こう」

「あの、行こうつてどこへ……わわっ!」

まだ疑問が残っている明日香の手を取ると、俺は停留所の縁に立ち、ドアの開閉ボタンを押した。

そして、自分のグラシユの電源をONにする。

「両足を軽く前後に開いて」

「は、はいっ」

「じゃあ次に、かかとを軽く浮かせて」

「こ、こうですか?」

「そうそう。それじゃ1、2の3で飛ぶから、しっかり手を握って、あとは流れに任せて力を抜いて」

「飛ぶって……ここから、飛ぶんですか?!」

「うん。じゃ行くよ」

「ちよつ、ちよちよちよまーちゃん?!」

テンパリ具合が最高に可愛い。思春期の男の子が好きな子にイタズラしたくなる心境がよく分かった。

「1、2の……」

「え、えええつ、ちよつと、あの、そんなことしたら落ち、落ち……」

「3、FLY!!」

「わあつ、わああああつ?!?! 落ちちやいますううううつ!」
明日香はその日、空に堕ちる。

空飛ぶ願い

「わあ……」

初めての空中浮遊も明日香はしばらくすれば慣れた様子で、嬉々として遠ざかる地上を見下ろしていた。

適応能力の高い子だ。昔はあんなに気弱そうだったのに、人とは成長する生き物だということをまざまざと思い知らされる。

「見てください、まーちゃん！ トビウオが！ トビウオさんがいますー！」
そして、興奮してはしゃいだ拍子に、ぎゅっと抱きしめられてギョツとする。

背中に感じる柔らかな感触に耳まで真っ赤になってしまう。人とは成長する生き物だったと実感した。

「すごいですね。この靴があつたら、本当にどこへでも、一瞬で飛んでいけちゃいそうです。……昔、まーちゃんが約束してくれたみたいに」

「……覚えてたのか」
「もちろん。だから、これも大事にしてたんです」

そう言って明日香は髪飾りに手を伸ばした。よく見るとそれは、昔、明日香との別れ

際に渡した当時の宝物、ゼフィリオの壊れた翼だった。

「それ、確か渡した時に明日香が壊したって勘違いした羽だよな」

「はい。形もなんだか可愛かったので髪飾りにしてみました。どうです？ 似合ってますよね？」

「ああ、似合ってる」

むしろ、明日香ほどの美少女になればなんでも似合うだろう。でも、そんな無粋なことは言うつもりはない。

それよりも、頭の中にあるのは、子供の頃の記憶だ。

『この先お前が一人でどうしようもなくなったら、その時は、これをぎゅつとして、お願いしろ。空に向かってな』

『空に向かって、お願い……？』

『そしたら飛んでって助けてやるから』

その言葉は、泣いていた明日香を慰めようとしたものだった。

同時に、俺の心の弱さを現したものであった。

空に手を伸ばせば届くと、誰よりも空に近いのが自分だと信じれたあの頃。

俺はなにを思い、空と向き合っていたのだろう。

心締め付ける黒い感情が、今では当たり前のように胸の内にある。

「息苦しさの中で空を飛んで、まるで馬鹿みたいだ」と幼い頃の日向晶也は笑うのだろうか。

分からない。

でも、確かに言えることは一つある。

それは、俺が一步踏み出すことができたということだ。

「まーちゃん？」

「ああ、ごめん。ぼーっとしてた」

「分かります。綺麗な景色ですもんね」

見下ろしながら明日香が言う。

思い馳せていたのは記憶の方だったのだけど、わざわざ否定はしない。

俺も好きだから。

空から見下ろす、この景色が。

|| ?

日本の南、南洋の更に南に南に位置する、四つの島からなる街、四島市——。

人口5万人の地方都市であるこの街は、一見すると、ただの田舎町に見える。

しかし、ここは現在、ある種『異世界』と言って差し支えないほど、変わった光景が広がる場所となっていた。

反重力子の発見により発明された、夢の空飛ぶ靴、アンチグラビトンシューズ、通称『グラシユ』。

羽も使わず、エンジンも使わず、身体能力のみで飛ぶことができるこの靴は、人間に新しい視界をもたらした。

空港法との兼ね合いにより、未だ民間レベルでの自由使用には制限が多かったが、一部の地方都市では、実験的に使用が解禁されていた。

そのうちの一方で、全国的にも最もグラシユの使用が多いと言われているのが、ここ四島市なのだった。

その利用は若年層を中心に、全世代に渡って広がっていった。

中でも学生の利用者は非常に多く、四島の中のひとつ、ここ久奈島においても、日常的に通学的手段として利用されていた。

「ん？ あれは——」

空の旅もそこそこに学校が見えてきた。

「あそここの停留所に降りるから準備しといて」

学校横にある停留所を指差して着地の姿勢に入る。まだ着地には慣れていないだろうから、地面すれすれまで降下するつもりだ。

「はい、到着……と」

自動で速度を弱めてくれるシューズの力を利用し、俺たちは学校の停留所へ降り立った。

「ほら、明日香。もう手を離しても大丈夫だぞ」

「え、え？ あ、はいっ」

言うとおそろおそろという感じで、ようやく明日香の手が俺の手から離れた。

流石にしがみつきは至福だったが体裁が悪かったので、せめてということを手を繋いでいたのだった。

それだけでもよからぬ噂の原因になりそうだったので、早めに解消しておくのがいい。

「すごく、すごくすごく楽しかったです！ 今までで一番わくわくして、なんだかもうっ、興奮が止まりません……っ！ まーちゃん！ 私に飛び方を教えてください！」
「ドウドウ。落ち着け明日香。気持ちは分かるけど、今は無理だ。これから手続きがあるんだらう？」

「ううっ、そうでした。忘れてました」

「まあ、明日にでも教えてあげるから——」

「きよ、今日からとかってダメですかね？」

明日香は、もじもじとしながら、チラチラとこちらの様子を伺ってくる。

駄々をこねる子供みたいだと自覚があるのか、けれども羞恥しながらも、それでも「はやく空を飛びたい」という気持ちには嘘をつかなかったようだ。

思わず微笑ましくなって笑う。

「いいよ、でも放課後な。明日香は手続きが終わったら先に帰るんだろ？」

「はいっ、小一時間で終わるみたいです」

「なら、学校が終わって準備ができたらメールするから。それまでお預けだな」

「先に飛んじやうというのは」

「ダメだ。最初は指導員がいないと、思わぬ事故が起こるかもしれないからな」

俺も、初めての時は白瀬さんと葵さん——各務先生に見てもらった。

今思えばそれはとても幸運なことで、そして、あの時と同じことを今度は自分がするのだと思えば感慨深くなる。

とにかく、過保護過ぎると思うけど明日香には我慢してもらおうように説得すると、「分かりました！」といい返事が返ってくる。

十年間、別に会いに行こうと思えば会えなかったわけじゃないけど、それでも会っていなかった明日香がこんなにも明るくなったことに少しの違和感がある。でも、それは成長したということ、なにより純粹に、こんなにも美少女に育ってくれたことが一人の友人として誇らしかった。

明日香と話しながら歩いて行くと、そのまま正門にたどり着いた。

そこに見知った人を見かけた俺は頭を小さく下げて挨拶した。

「おはようございます」

「ああ、おはよう。なんだ晶也。ガールフレンドがいたのか？」

正門をくぐるるとき、そこには旧知でもある各務先生が朝の挨拶のために立っていた。

「えっ、いや、その……っ」

「違いますよ。小さかった頃に一緒に遊んでた子です。からかわないでください」

「……まーちゃん」

顔を真っ赤にして慌てふためく明日香が可哀想だったので素早く訂正する。

心なしか明日香が残念そうな目で見てくるが、各務先生を相手に僅かにでも弱味を見せるのは危険だ。

「悪い、悪い。晶也が鳶沢以外の女の子と一緒にいるのが珍しくてな」

「その言い方もからかってるでしょ」

明日香が「鳶沢？　さん？」と頭を傾げていたが、あまり突っ込んで欲しくなかったので正門をくぐり抜け、誤魔化すように教室棟を指差した。

「職員室は、こっちの教室棟の一階にある。入ってすぐ見えるところだから、迷わないとは思うけど……」

「はい、ありがとうございます。その時は誰かを頼ってみます」

「うん、それじゃ放課後」

「はいっ！　行つてきますっ！」

ペコツと頭を下げると、そのまま職員室のある教室棟へ。

「さて、と……」

明日香と別れて、俺は正門へ向かって振り向いてみると、各務先生と目が合い、その口元は面白いものを見たとしても言うように笑っていた。

嫌な予感を感じる。

具体的によく分からないが、あの人はたまに俺を追い詰めて楽しむ節があるからだ。

余計なことしないでくださいよ。

強い意志を込めてアイコンタクトを送るが、薄く笑って返されるだけだった。

結局俺はモヤモヤとした感情を抱きながら、教室へ足を運ぶことになった。

「大丈夫だ。ああ見えて各務先生は理不尽なことをさせない人だ。何も心配することはない」

自分に言い聞かせながら、教室へ入ると自分の席について息をつく。

「ねえ、さつき手を繋いでたの……誰？」

「……出し抜けだな」

そこへ唐突にクラスメイトが現れた。

鳶沢みさき。クラスの女子でも呼び捨てにしているのはこいつくらいで、なんだかんだでよく喋る知人以上、友達以下。

そしてこいつは、こういった唐突な会話の入り方を、特に朝方よくやらかす。

朝に弱く、それは毎朝後輩に起こしてもらわないと学校に遅刻するレベルの重症だ。だが、今日はひと味違った。

剣呑そうな表情で、その瞳の奥には確かな理性を宿して射抜いてくる。

もはや朝と昼で別人のように成り果ていることが慣れているため、朝方でここまで低血圧でない姿は、逆に「誰だ」と思わせるほど……なんとというか怖かった。

「よく見えてたな」

「そりや見えますよ。真白とふたりで後ろにいたからね」

「えっ!？」

なにそれ怖い。

もしかして抱きつかれていたところも見られたのか？

どうかにはぐらかしたいと思案するが、それは許されなかった。

「それでえ……あの子、誰？」

その笑顔には心なしか威圧感すら放ってくるみさきに、俺はどうとう屈して、全て吐かされる。

尋問は、ホームルームが始まるまで続いた。

詰めの甘さ

あの後、みさきからの尋問を先生がやってくるまでなんとか乗り切り、ホームルームで呼び出しを受けた。

そして放課後。

「晶也ー！ 放課後だよっ放課後ー！」

「……知ってるよ」

「あー、やっと、今日がはじまるんだー。何しようか何食べようか無限の可能性が私を襲うよー！」

割と心配になってくる朝とのテンションの差はこの一年でだいぶ慣れていた。高校へ上がるまでは昼からしか会ったことがなかったので知った時には驚きが強かったが、もうすでにそういうモノなんだと考えている。

「もー、みさきの豹変っぷりは相変わらずすごいよねー。友達やってて心配になるレベルだもの」

「青柳もそう思ってたのか？」

「思う思う。最初はこの子絶対、午前と午後で双子が入れ替わってると思ったもん」

絶妙な表現だった。

それにしても知らなかった。

クラス委員をしているみさきの友達で部長の妹。よくマネージャーとして高い能力を見せる一方で愉快な一面をもつ、こちらはまともな人間である。

他人についてどう思うかなんて話は意外としてこなかったので新鮮に感じたけど、そういえば部活のこと以外で話すことは少なかった。

「人を心の病気みたいに言わないでよね。私は自分にしよーじきに生きてるだけだよ？」

「ほんと羨ましい性格だな」

「うん、わかる」

「あはは、晶也つてばめんどくさい性格だもんねー」

「……めんどくさい男でごめんなさい」

若干、拗ねた声が出ていた。

みさきが言いたいことは分かっている。

何せ、俺は自分の我儘にみさきを突き合わせているようなものだった。

その我儘について文句の一つ二つあっても、それは受け入れなければならぬ。

「あはは、ごめんごめん。そんなつもりなかったんだって。お詫びにうどん奢るから

さー」

「いいよ別に、この後用事があるし」

「今日は休養日だよ、日向くん？」

「部活とは別件で先生に呼び出されたんだ」

嘘である。

呼び出されたのは昼休みのことだ。

そこで俺のグラシユの公認指導員としての資格についての相談になったが、頼まれるまでもなかったということとで解決している。

ならなぜ嘘をついたかと言えば、明日香との約束があるからだ。

空を飛ぶ練習をみると約束している。

あまり長く待たせると先走って練習を始めないか心配だった。

「じゃあなみさき、青柳。また明日」

「……タイミング悪いなー、もー」

「あはは、みさき、日向くんをデートに誘うの失敗しちゃったね」

「……失敗してないし」

なんとなく放っておけない気がしてお節介だとは思いつつも、こうして助けようとする。困ったことに、嬉しそうにするものだからなかなか止められないでいた。

「おーい、みさきー」

俺は教室の中のみさきに、真白の存在を教えたと、

「じゃ、俺はこれで」

「あれ、今日はご一緒されませんですか？」

「ああ、先生に呼び出されたんだ」

「そうですか。ありがとうございます、晶也先輩。また明日お会いしましょう」

「ん、また明日。それじゃ」

二元気に見送ってくれる後輩を背に、俺はその場をあとにした。

? ≡

「おーまたせー」

「みさき先輩っ！ んぎゅーっ！」

「いやいや、そんなにくつついてこなくていいよ真白ちゃん」

「つてあれ、晶也はもう行っちゃった？」

「はい、あちらへ。もう行っちゃいました」

「……職員室と反対方向に？」

「え……？」

「……まさか——例の手繋ぎちゃんか」

フレンドシップ

「びっくりしました。まさかまーちゃんが、コーチの名人だったなんて、わたし知らなかったです！」

明日香は目をキラキラさせていた。

確かに、明日香が知っているとすれば選手としての日向晶也だろう。

それもだいぶ昔に活躍しているだけでここ最近は特にこれと言って目立った覚えはない。一部の掲示板やブログなどで去年の秋季大会、準優勝したみさきのセコンドをしていた俺を何者だと盛り上がっていたが生憎と名前を出していたのはみさきのみだったので特定されるには至らなかった。昔と今の俺を結びつけるのは難しいだろう。

それに選手とコーチの能力はイコールではないので、明日香の反応も分からないわけではない。

「名人とかじゃないよ、慣れてるっただけで」

「そうなんですか？ でもすごいです！ すごすぎますっ！」

明日香はいろいろなハードルの基準が低いみたいだ。

「久奈浜で生活するには、グラシユの扱いをマスターするのがとても重要だと聞きまし

た」

「そういえば、公認指導員の話を持ちかけてきたのは先生だった。

ということは明日香はクラスメイトになる確率が高くて、この話をしたのも先生だろう。

……あの人、余計なこと言っていないよな。

「なので、頑張つて覚えますので、ご指導よろしくお願いしますっ！」

長い髪ごと、ふあさつとお辞儀をした。

き、気の入りようが凄い。

「う、うん。俺に教えられることなら」

まあ、あれだけ興味を持っていたんだ。

この食いつきようは当然でもあった。

「じゃあ、グラシユの基礎知識から教えていきます」

「はい、コーチ！」

こうして今後定期的に開かれることになる俺と明日香の講習が始まった。

「よし、基礎知識はここまでにして、それじゃ今度は実際に飛ぶ練習をしようか」

「待つてました、コーチ！」

「詳しい歴史についてはまた今度な」

「うっ……！」

「調子いいなあ、もう」

というわけで俺は明日香の横に回ると、シューズの踵にあるスイッチを入れた。スカートだと意識したかもしれないので、動きやすい服装にしてくれてありがたい。

「そういえばそのジャージって」

「前の高校の時の体操着です」

「へえ」

「今も連絡を取り合ってる友達と交換したモノなんです」

「交換？ 体操着を？」

「はい、お別れの時は色々と交換するみたいで、お友達といっぱい交換しました」

「お気に入りのマグカップとか、ハンカチとか、制服のボタンやシャツだったり、……あつ、でもこの髪飾りはちゃんと断りました。まーちゃんとの大切な思い出だったの

で」

……いい話なんだろうけど、明日香のお友達がちよつと怖い。

本土では当たり前なのか？ とりあえずこの話題は封印しておこう。

「……よし！ じゃあ起動したからまずはさつきやつたみたいに足を前後に軽く開いてみて」

「さつきと同じように……ですね」

「うん、そのまま、バランスを保ちつつ、軽くでいいから両足の踵を浮かせて」

「はいっ」

「よし、じゃあ後は自分のタイミングで、シューズに命令を出せばゆっくりと浮き上がるよ」

「え、ス、スピードとか大丈夫ですか、急に早くなったりとか」

「車と一緒に、最初はゆっくりだから、その心配はないよ」

「わ、わかりました！」

明日香は深呼吸して姿勢を整えると、

「い、いっせーのーで……」

身体をキュッと上へと伸ばし、

「FLY!!!」

ブウンと機械音が微かに響き、ピインと涼やかな起動音と共に、明日香のグラシユに羽のオブジェが生えた。

「わあ……す、すごい……」

そして、ゆっくりと、その身体が宙へと浮かび始めた。

「う、浮きました、動きました!! や、やったっ、わたし、飛んでます、飛んでますよっ！」

よほど嬉しかったのか、プールではしゃぐ小さな子のように、こちらに向けて手を振り回している。

手をバタバタさせて見ている微笑ましい光景だ。

だが、そんな時間も長くはなかった。

「わ、わわわっ、きゅ、急にバランスがあ……!?!」

明日香の身体がガクガクとブレはじめた。

手足をバタつかせ、やがて明日香の身体は仰向けになり、そして。

「きゃああ、おっ、落ち、落ち、落ちますっ!!」

そのまま、スピードを落としてっつ、お尻から地面へと落下したのだった。

?
三

ふとスマホを取り出した。

電源をつけて時間を確認。

気がつけばもう夕方の5時を回っていて、あたりもそろそろ暗くなるうとしていた。

そのままカメラを開いて、ビデオに切り替える。

フレームに映すのは今日、再会した十年來のメル友である明日香だ。

録画スタート。

「きゃあ、きゃあああ、落ちる、落ちる〜!」

明日香は地面に落下してもなお、両手でもがき、両足をバタバタさせていた。あたかも陸に揚げられた魚トビウオのような姿だが、美少女は何をしても美少女だった。

「落ち……って、あ、あれ?」

録画ストップ。

スマホをしまい、尻餅をついたままの明日香に手を差し伸べる。

「いつの間にか地面に降りてただろ? これもグラシユの機能のひとつなんだよ!」

掴んだ手を持ち上げ、よいしょと立ち上がらせた。

「さて、今日はこのあたりにしておこうか」

「まーちゃん今、何か撮ってましたよねっ!？」

「気のせいじゃないか？」

「ピコンって聞こえました!」

「ドウドウ。落ち着け明日香。あまり帰りが遅いと親も心配するんじゃないのか？」

「うううう、後で絶対に消してくださいね。……親にはまーちゃんと練習してくるって
言っているのですまだ大丈夫です」

「……」

俺は無言で首を縦に振り、頷きながら思った。

もしかしてそれって、親もまーちゃんが女の子だと思っっているんじゃないでしょうか、と。

「だから、その……」

もじもじと、恥じらうようにして、上目遣いで明日香は言った。

「も、もう少しだけ、練習を手伝ってください」

「いいよ、もう少しだけやろうか」

我ながら即答とはちよろいものだ。

でも、それだけの価値があると、胸の内から湧き上がる思いが告げている。
ただ、それだけ。

「ありがとうっ、まーちゃん！」

その一言が、なによりも俺を狂わせる。

ーだからキミの笑顔は愛おしい、なんて。

なにが「だから」なのか、俺は知らない。

エターナルフォースブリザード

「送ってかなくて大丈夫か？」

「はい、家はすぐそこですし、こんな時間まで付き合ってもらいましたから」

「遠慮しなくていいのに」

「そこは、あれです。親しき仲にも礼儀あり、というやつです」

砂浜から家の近くの停留所まで、練習もかねて今朝と同じように手繋ぎで帰ってきた。

明日香の家は反対側へ向かうものの、それほど遠いわけではない。

男の子としては送っていききたいと思ってしまうが、明日香は別にいいと断っている。流石に、ただの友達がそこまでしゃしゃり出るのも何か違うだろう。

そういうわけで明日の朝、一緒に登校するために待ち合わせの約束をして今日のところは解散することになった。

「それじゃ、おやすみなさいコーチ」

「コーチ呼びが抜けてないぞ、明日香」

「あはは、本当ですね。うっかり他の人がいる前で言わないように気をつけないと」

「確かに、人前でコーチって呼ばれたら気恥ずかしいから、できれば二人きりの時だけにしてくれると助かるよ」

「はい、分かりました！ 二人だけの秘密ですね！」

明日香は急にウキウキとし出した。秘密が大好きなんだろうか。こんな子どもっぽいところを見つけたびに昔のことを思い出す。

気弱でおとなしい、まさにか弱い女の子そのものだった姿は、今の明日香からは想像できないだろう。

俺も変わってしまった自覚があるが、それと同じくらい明日香も変わっている。

「それじゃ、また明日。気をつけてな」

「はい！」

たーのしみっ、たーのしみー、と明日香は、本当に楽しみな様子で、びよんびよん飛び跳ねるように帰っていった。

「早く、うまく飛べるようになればいいな」

去っていく明日香を見ながら、祈った。

どうか、彼女は俺と同じ道を歩みませんように。

楽しい気持ちを、忘れませんように。

?
≡

今日は部活がないことを事前に知らせていたが、遅くに帰宅したことを親は特に気にもせず、おかえりー、と迎えてくれた。

ただいま、と一言だけ返して二階の自室へ向かう。

本土ではARを進化させたMRというものが流行っているらしく、それを聞きつけた母さんが取り寄せたデバイスが、階段を登ろうとしたところで鳴った。

機械に弱めの母さんは、最新のアプリを扱えることが嬉しいらしく、家の中で意味もなく通話を求めてくる。

四島で他にMRを使っている人は居ないからな。

どうせならさつき直接言えばと思ったが、これに付き合うくらい安い親孝行だ。

あたかも、宙へ浮かんでいるように見える着信マークをタップする。

「もっもっ」

『そうそう、晶也、お隣さん今日引越してきたから』

「えっ、ついにお隣誰か引越してきたの？」

驚いた。二年前から空き家だったお隣だ。誰か住み始めるような気配がなかったの
でいきなりだとは思うけど、そうとなれば隣の家に向かう窓のカーテンは閉めておかな
いといけない。

「昼間、業者さんが家具運び込んでいたからね。家主さんとはまだご挨拶できてないん
だけど、その家の子がおソバを持って来てくれてね。晶也と同じ年くらいのしつかりし
た子で可愛いかったわよ。やったわね」

「……へえ、そうなんだ」

通話中のアイコンをはじく。母さんの冗談はさておき。

引越越して俺と年の近い子ならこっちに転校してくることになる。明日香もそうだ
けど4月も半ばの中途半端な時期に転校生って、俺だったら耐えられそうにない。

「困ったことがあれば助けてあげないと……」

自室の扉を開けて入ると、外から光が入っていた。

おそらく、お隣さんはこの部屋の存在を忘れているのだろう。

気まずいなあとはいながら、せめて一言だけ挨拶しようと思いつたところで、フ
リーズ。

「え」

「へっ？」

まるで時間停止の魔法にかけられたように、二人して微動だにせず、そのままの体勢を維持し続けていた。

視線が縫い付けられたようにお互いの顔を見つめ合う。

「……………」

「……………」

一言、挨拶するつもりだった。

こんばんは、と一言だけ言ってカーテン閉める。

たったそれだけのはずだったのに、目に映る光景の衝撃に、頭が一瞬真っ白になって混乱する。

「ど、どうも……………」

なんで、目を逸らすだとか、後ろを向くだとかしなくて声をかけたんだろう。

やがて、破裂寸前の何かから溢れ出した声とともに、

「……………きつ、……………」

決壊した。

「ぎゃあああああああああああ!?!」

「うわあああああああああああああああ!?!」

俺も釣られて悲鳴をハモらせる。

彼女の悲鳴が窓越しでも大きかったのもあるが、目のやり場のないあられもない姿に、覚えのない感情が止められなかった。

「わ、悪い!　すぐにカーテン閉めるから!」

「ヤだ、来ないで!　近寄らないでください!」

「いや、そういうつもりじゃなくてっ」

不慮の事故なのに、まるで変質者になった気分だ。

このままじゃ拉致があかない。

「つていうかそっちがカーテンを閉めれば……」

「あ」

ちよつと間抜けな声を残して、シャツとカーテンが引かれる。

続いて俺もカーテンを引き、目に毒な光景が遮られた。

「はあ……」

ようやく息をつく。けど、見てはいけなかったものを見てしまった感覚が消えてくれない。

今のはちゃんと事故だつて分かつてくれるのか？

最初から印象が最悪だなあ、これは。

こんなはずじゃなかったのに。

結局、その日は謝罪も弁解もさせてもらえない機会には訪れなかった。

？
≡

「顔赤いし、さつき大声で叫んでたけど、何かあったの？」

「なっ、何でもないから！」

間違え少年と集結フォーリズム

昔から間の悪い子だと周りから言われ続けて来た。

中でも一番間が悪かったのは、みさきとの出会いだった。

たまたま、いつものように砂浜の上空で練習していたら、当時初心者だったみさきと出会った。

そして世界大会を目前に控えていた時期に――初めて挫折を知った。

今なお悪夢として忘れられない出来事だ。

だが、昨日のアレはもつと危険だった。

下手すれば俺は死んでいた。

社会的に。

だとすれば今日のこれは、たいそう間が悪いと言えるもので……。

「行つてきます」

「行つてきます」

同じタイミングで家を出る。

お隣さん同士、それは知らんぷりできる距離でもなく、

「あ」

俺と彼女は、互いに視線を結びつけた。

?
≡

俺も明日香との待ち合わせがあり、彼女も登校するため立ち話しているわけにもいかず、同じ停留所を目指して並んで歩く。

「あ、あのさ」

「っー」

警戒マックスだった。

話しかけると彼女は身を硬らせ半歩距離をとってくる。

さりげないだけに、心の傷は深くなる。

だが、それも仕方のないことだ。

俺が加害者かどうか話し合う余地があっても、彼女は間違いなく被害者だった。怖がるのも無理はない。むしろこうして並んで歩いてくれるだけ優しいまであった。

とりあえず昨日のことは全力で謝っておこう。

「その、昨日はごめん」

「い、いえ、昨日のことは私も、不注意で……」

どうやら、あれから色々と考えていたのは一緒みたいだ。

絶対に許さない！　なんて言われたらどうしようもなかったので、落とし所を作ってくれたのには感謝しかない。

まあ、気まずさは残るわけだが……。

「そ、そうだ、自己紹介がまだでしたね」

沈黙を破ったのは彼女だった。

この空気に耐えられなかったのだろう。昨日の羞恥を投げ出して、意地でも明るくしようと頑張ってくれている。

笑顔が引き立っているのを見れば一目瞭然だ。

「そ、そういうえげそうだな。昨日、家に来てくれたみたいだけど俺は居なかったし」

もしその場にいれば、こじれずにすんだのだろうか。

そんなイフなんて考えても仕方ないのでなんとか話題をつなげるために思考を割く。

「俺は日向晶也。久奈浜学院の二年です。これからお隣同士よろしくお願いします」

「ご丁寧ありがとうございます。私は、市ノ瀬莉佳っていいいます。先週から高藤に転

校することになって、本土からやって来ました。一年生なので日向さんは先輩ですね。こちらこそよろしくお願いします」

「ああ、その制服やつぱり……だから家を出るの早いのか」

「そういう日向さんも早いですよね。私の方が遠いと思うのですが……？」

「俺は友達と待ち合わせしてるんだ」

「なるほど。いいですねー、そういうの。私も昔は友達といつも一緒だったんですが、その子が転校してからはいつも一人で……一応、中学のときの友達がこの辺りに住んでるみたいなんですけど、生憎と別方向みたいで……」

お互い緊張も解れてきた、と思う。

自然な会話の流れで、話題はいつの間にか移ろっていく。

「四島でうどんといえ、ましろうどんだな」

「あつ、知ってます。実はわたしの……中学のときに知り合った方の友達なんですけど、彼女の家がそこでして。今度の休みに遊びに行く予定なんです」

「え、有坂と知り合いなのか？」

「はい。ということは日向さんも真白と顔見知りなんですか？　なんだか、思ってたより世間って狭いんですね」

「四島が狭いっていうのもあるだろうけどな」

外を歩けば見知った顔ばかり。

そのため近所付き合いなど横の繋がりが深い。

俺もあまり交友関係は広くない方だけど、それでも四島にある各校に一人は必ず知り合いがいる。まあ、チャットで知り合っただけの顔も名前も知らない知り合いだけ。

「あつ、おーい！ まあーちゃん！ おはようございまーすっ！」
しばらくして停留所へ着いた。

元気に大手を振って出迎えてくれる明日香を見て、自然と笑みが溢れてくる。

「あの方が日向さんのお友達さんですか？」

「ああ、あの子も丁度転校してきたばかりで、もし良かったら紹介するよ」

「……そうなんです。でしたらお願いします」

あれ？ 今のって笑ってる顔だったよな？

心なしか威圧感すらある。

この表情はよく知っている。みさきがたまにに向けてくるから。

でも、みさきの場合はFCの話題だけが続いていると勉強嫌いが転じて出てくるのだが、いかんせん、市ノ瀬さんとの付き合いは短いからどう言った意思表示なのか分からない。

……考えていても仕方がない、か。

「あれ、まーちゃん、その子は？」

とてとて、と近づいてきた明日香は不思議そうに首を傾げた。

「紹介するよ。昨日、家の隣に引越してきた市ノ瀬さん」

「はじめまして。市ノ瀬莉佳って言います」

「で、こつちが俺の友達の倉科明日香」

「こちらこそはじめまして。倉科明日香です」

両方を仲介する立場として、どちらも若干ぎこちなさを感じるけど波長は合うんだろ
うなと予想している。どっちも丁寧な言葉を使うし、何より可愛い。

四島へ来たばかりで頼る人が少ない身同士で仲良くなれるはずだ。

「それにしても、友達って言ったのに、ガールフレンドだとは思いませんでした。彼女
さんだったんですね？」

「はわわっ!？」

「こら、あまりからかうなって。明日香がおもしろい動きになっちゃっただろ」

「……ということとは、彼女さんじゃないと？」

「違う違う、俺と明日香はそんな関係ー」

ふと、脳裏に過ぎった、昨日の笑顔を思い出して顔が熱くなる。

あのときは一瞬だったけど、俺を救ってくれる未来が見えたような気がした。それが

どうしても、信じられなくて……何より、可愛いよりも愛おしいという感情が出てきたことに羞恥してしまった。

俺と明日香は、メル友だ。

昔、よく遊んで、しばらく離れ離れになって。

それでも、繋がり続けようとした……大切な関係。

なのに、おこがましいだろう。

ただ、友達というだけの関係なのに。

好きすら伝えていないのに、愛おしいなんて絶対に間違っている。

「俺と明日香は、友達だよ」

「すぐく長い葛藤があったように見えましたけど」

「冗談でも彼女だつて自慢したら、俺と明日香の関係が壊れちゃうからな!」

「ま、まーちゃんが壊れた」

明日香が近寄ってきて心配そうに顔を覗き込んでくる。

女の子の甘い匂いが鼻をくすぐった。

「ふふ、仲がいいんですね」

「それはもう、友達を超えた存在だからな」

「え、もしかしてそれって」

「まーちゃん……」

頬を染めてもじもじする明日香がまた可愛い。

そして、微笑ましそうに俺を見てくる一つ年下の少女が視界に入って、なんだか、表現し難い感情に襲われた。もによる？

まあ、どうでもいい。

今のテンションが振り切った俺を止める術はない。

「そう、俺と明日香は友達以じよー」

「へえ、晶也くんは朝から女の子二人も侍らせていいご身分ですなあ」

時が止まる。

驚きだとかそんなんじゃないやなくて、テンションが振り切った俺を曝け出すことを自重する。冷や水を浴びたように思考がクリアになって、いつもの調子を取り戻す。

「どうしたんだ、みさき。それに有坂。こんなところで朝練か？」

みさきは笑っていた。

「まさか。ただ、ちよつと早く目が覚めたから一緒に登校でもしようかなって」

「そうです！ みさき先輩すごいんですよ！ いつもならわたしが起こしに行くまで全く起きる気配がさらさらなのに今日は嵐でもくるのか身支度全部終わっていて、少しシヨンボリです」

「ちよいと真白ちゃん？ 愛しの先輩のこと少し誤解してない？」

「誤解なんですか？」

「うぐっ……じ、事実だけど」

久々に真白にやり込められているみさきを見て思った。

相変わらず、間が悪い。

ナイストウーミートウーONEW

「あの、まーちゃん、この方たちは？」

きよとんとした顔で明日香が質問してくる。

気にするなど言いたいところだが、それよりも早くみさきが降りてきて明日香の目の前に降り立った。

「はじめましてー、うちの晶也がお世話になってまーす！」

「おい、だから降りるなら停留所に……」

だめだ、聞く耳を持つちやいない。

なぜかみさきが明日香に興味津々そうに、戸惑う彼女の周りをぐるりと回って身だしなみチェックをしている。

その隣では、有坂と市ノ瀬さんが両手を絡ませてぴよんぴよんと飛び跳ねて旧交を温めていた。

「えっ、うそ。まさかこんなところで会うなんて思わなかった」

「こっちこそだよ。ひさしぶりだね真白」

「うん、ひさしぶり、莉佳！」

だいぶ微笑ましい雰囲気で、後輩組は安心して見られる。

だと言うのに一方で、明日香とみさきの対面には謎の緊張感が強いられた。

「ふむふむ、なるほど、こういうタイプもあるのか」

「あ、あの……まーちゃん……っ」

まじまじと観察する目についてに耐えられなくなった明日香が情けない声で助けを求めてきたので首の後ろの襟を掴んでみさきを引き剥がす。

「およ?」

「やめろ。明日香が怖がってるだろ」

「にやーん」

「……………はあ」

猫の真似をして誤魔化そうとするみさきに思わずため息が出る。こいつの調子に合わせたら、話が一つも進まないだろう。

「こいつの名前は鳶沢みさき。一応クラスメイトだ」

「わっ、人の自己紹介かってに取らないでよお。昨日からどう挨拶しようか考えてきてたのに。てか一応って、いる?」

「はいはい! わたしは有坂真白ですっ、みさき先輩の配下というか、しもべというか、そんな感じでもよろしくです!」

みさきが不満そうにしている横に有坂が飛びつく。

明日香はようやく名前を知れた二人に対して、居住まいを正すと、ぺこりと頭を下げ
て挨拶を返した。

「鳶沢、さん？ ……あつ、名乗るのが遅れました。倉科明日香です。まーちゃんとは幼
馴染で、本土から引つ越してきたばかりです。これから久奈浜学院に通うことになっ
てます。よろしくお願いします！」

「おいそこツインテール、どこに笑う要素があるのか言ってみろ」

「ま、まーちゃん……ぶふっ」

クソガキめ……。いや、有坂は構ったら喜ぶやつだ。大人になってこれ以上の追及は
よそう。

俺と有坂のやりとりで少しの時間が空けられてから、何か裏のありそうな笑顔のみさ
きが、うんっ、と頷いてから手を伸ばした。

「改めまして、晶也と同じクラスの鳶沢みさきです！ 常にお腹を空かせたキュートな
女子高生で、うどんとお菓子をくれたらどこでもついて行きまーす。気軽にみさきって
呼んでね？」

「……はい、みさきちゃん。わたしのことも明日香って呼んでもらえたら嬉しいです！」

「うん、よろしくねー、明日香」

おそらくみさきが考えていたという自己紹介の痛々しさに、思わず空を仰いだ。それでいいのかと思いつつも、明日香がみさきに伸ばされた手に応えて握手を交わしたのを見て、常人同士がそれでいいなら口を挟むべきでは無いのだろうか」と結論付ける。

「あ、わたしは真白でもましろんでもお好きなように呼んでください、明日香センパイ！」

「はい、真白ちゃんって呼ばせてもらいますね」

真白と明日香の呼び方が決まったあと、見守っていた市ノ瀬さんが前に出て声をかけてくる。

「日向さん、もうそろそろ学校へ向かわないとなんで、お先に失礼しますね」

「ああ、悪かったな、なんか巻き込んだみたいで」

「いえいえ、日向さんがプレイボーイなのは今日お話しした瞬間からビビッと来てましたから」

まだ警戒されてるのか？

……いや、少し笑った感じ……揶揄っているのか。

朝から同じ学校の女生徒三人にかこまれていたら言い訳のしようがない。別にそんな関係では無いのだが、市ノ瀬さんから見れば変わらないんだろうけど。

誤解であることは承知だろうし、これぐらいの距離感なら気まずさもなくて済むから

ありがたい。

「じゃあね、真白。また時間ができたら遊びに行くから」

「うん、美味しいうどん食べさせてあげるから絶対来てね！」

少し離れた先にある停留所へ向かった市ノ瀬さんは姿勢の良い体勢でグラシユを起動させて空へ舞った。行き先は俺たちと反対の福留島方面だ。

「はあ……すごく綺麗です」

「ああ、驚いた。基本に忠実でブレがひとつも感じられない」

上昇角も、そこから水平方向へ切り替える滑らかさも、どれひとつ見ても完璧に完成されている。

「すごい綺麗なフォームですよね？　莉佳って全国大会でも優勝候補の一角だったんですよ」

「なるほど。有坂が知り合っただのは全国大会ってことか。ならFCをやってる選手だったんだな」

「はいー！」

元氣よく、有坂は頷いた。

「……勝てる自信はあるのか？」

昨年、中学生の部、夏の全国大会。

その栄冠を手にした久奈浜の「暴れ姫」は、遠くなつていく市ノ瀬さんの背中を見送りながら口元を笑わせた。

「負ける気がしないです!」

?
≡

「えふ、しー……」

—— 思い出してください。

「ん……?」

「あの、みさきちゃん」

「どうしたの?」

ふと頭を過ぎたのは、日が落ちかけたオレンジ色の空の光景。

夕方の柔らかな光の中で、二人とも夢中になって、一心に飛び続けた……記憶にない

記憶。

この久奈浜へ来てからまだ見ていない、幼馴染日向晶也の陰ひとつない笑顔が、そこにあった。

「FCってなんですか？」

番外編

砂浜の再会—1/2

小さかった頃は、無敵だった。

何にだってなれると思ってたし、だれにだって勝てると思ってたし、どこにだって行けると思っていた。

この世には無限の可能性が広がっていて、俺はちよつと背伸びするだけで、そこを見ることができた。

空に、手を伸ばすだけで。

小学校に入って、何度目かの夏。

俺は空を飛ぶための翼を手に入れた。

これまででは手を伸ばしても掴めなかつた空が、やっと、その尻尾をつかめたように思った。

懸命に走った。空を駆け回って、次へ次へと、進んでいった。

小さかった頃に見上げた空に、一番近くにいるのが自分だと思っていた。

これがあれば、どこへも行けると。

誰よりも先に、彼方へ行けると。

——そう、信じていた。

だから、その時が来た時、俺は本当に、何も見えなくなってしまった。

前に誰もいなかったはずなのに、そこに『誰か』がいた時。

行けるはずだった彼方が、遠く先へと、霞んで消えてしまった時。

もうそこには、俺がいる場所が存在しないように思えた。

彼方にあつたはずの蒼の世界は、俺のものでは、なくなってしまった。

伸ばした手は空を切り、掴んだ手のひらの中にはちっぽけな可能性しか残らなかつた。

「圧倒、『天才』日向晶也、最年少世界大会制覇」

だからなんだって言うんだ。みんな知らないだけで、俺より凄いやつがいる。

勝つ度に増していく期待という名の重圧に苦しめられながら、世界大会で頭の中にあつたのは本物の『天才』の飛ぶ姿だった。

『凄いな。キミはそういう風に飛ぶんだ。これ、面白いね』

ズブの素人だったはずのそいつは、俺とまったく同じ飛び方でピッタリとくつついてくる。

同じ場所で飛んでいるのに、同じ競技をしているのに。

俺は必死なのに、そいつは面白いと言った。

ふざけるな。俺が何年もかけて積み上げてきた技術を奪って、楽しそうにするな。楽しくできなくなった俺に、その笑顔を見せるな。

この時、決定的な何かが起こってるんだって思ってた。

勝つとか負けるとかそんなんじゃないやなくて……もつと単純で、もつと大切なものにようやく気付いた。

『ねっ？　ね〜！　もつと凄いや飛び方して見せてよ』

俺が持つてかれなかった感情を持ったまま、そいつは飛んでいた。

歯を食いしばって必死でやって俺はここにいるんだ。

楽しいって気持ちをごここかに落としてしまつてまで、ここにいるんだ。

お前みたいに面白いと言うやつに、一瞬でも、一箇所でも負けたら、俺は——。

振り切つてやるッ！

そう思つて、ギリギリの前傾姿勢で加速した瞬間だった。

『……遅いつてば』

そう言いながら、そいつは俺を真横から抜き去っていった。

『え?』

一瞬、世界が止まった気がした。

蒼の彼方を飛ぶそいつの姿に、未来の俺の姿が重なって見えた。

今の俺は、未来の俺に負けたのだ。

俺と言う人間の可能性が、全部、奪われた。

——その才能を前に勝てないと思った。

今はまだ勝てるだろう。でも、明日はもっと飛べるようになっていて、いつかは勝てなくなる。俺でなくても、俺と同じ飛び方ができるやつが勝てるようになる。

まるで生き地獄だ。

FCを変える天才とまで呼ばれた日向晶也は、その日、自分が飛ぶ理由を失ったのだ。

『もう、いいよ』

『え』

『もう試合はやめだ』

『どうして?』

不満そうにそいつは言った。

どうしてか？ そんなの決まってる、俺の全てが言い訳のしようもないぐらい否定される前に辞めたかったからだ。

『これ以上やつてもつまんないから。じゃあな、やりたかったらあと一人でやつてろよ』

強がるのが精一杯だった。

もう、疲れたんだ。

嫌いになったなんて、絶対に言えない。

誰よりも好きだったからこそ負けなくなかったし、誰よりも好きだったからこそ、誰よりもFCに愛されていると思いたかった。

でも、残酷な現実は心を蝕んでいく。

何もかもが、憎く思えた。

過去の自分が楽しそうに飛んでいる写真が目障りで、部屋に飾られたトロフィーが無性に自分を苛立たせる。

家に帰った俺は、ただ破壊衝動の赴くがままに、全てなかったことにしようとして――

翼をくれた人たちが自分のように喜んでくれている写真を見て、目の前が見えなく

なった。涙が止まらなかった。

そうだ。俺は期待されたくてFCを始めたわけじゃない。

順番が違う。

初めは憧れだった。

自由に空を駆け回る姿に憧れて、自分も飛べるようになって、期待されたかったのだ。

この時、俺は一つの決断を出した。

もう、楽しく飛べないのなら。

せめて最後だけは期待に応えよう。

重くのしかかる期待すらも、この履き慣れた翼で受け止めよう。

心の折れた自分ができる、大切な人たちへの贖い。

期待されたくて飛んでいたのに、期待してくれたのに翼を折る決意をした俺の、最後

の挑戦。

ジュニアの世界大会を難なく制覇した。

俺は心配をかけないために平静を装って、指導してくれた葵さんにFCを止めることを告げる。

『晶也……』

『葵さん、俺、自由に空を飛んでみるよ』

トロフィーや賞状はダンボールの中にしまい込んだ。

試合用のグラッシュも押入れの奥にしまつて尚、未だに胸のくすぶりは治らない。

だけど、かつて本物の天才と戦ったその場所に改めて立つてみると、思った以上に心は落ち着いていた。

たまに吹き付けてくる海風が、横を抜き去っていく光景を思い出させる。

でも、それも一瞬だけ。

雲ひとつない蒼の彼方には、なにもない。

考えてみれば、プレッシャーに押しつぶされそうになっていたあの時に全ての力を出せたとは言い切れなかった。全ての技術において負けていたわけでもなかったし、辞めたからこそ、初心者がある時突然急激に伸びることも、俺自身がそうであったことも思い出す。

「はは……なんだ、馬鹿みたいじゃん、俺」

要は、一番弱つたのは俺の心だ。

明日香に、泣き虫だった友達に強がって助けてやるなんて言って、空が繋がっている話をしたのもそうだ。

当時まだ俺が翼を得て間もなかった頃、好きだったアニメのフィギア、ゼフィリオン

の羽を託したあの時。

誰よりも繋がりを感じていたかったのは他ならぬ俺の方だったのだ。

思い合っていれば寂しくない。俺だけの一方通行になることが怖くて、明日香と約束を交わした。

『この先お前が一人でどうしようもなくなったら、その時は、これをぎゅつとして、お願いしろ。空に向かってな』

『空に向かって、お願い……？』

『そしたら飛んでって助けてやるから』

『ほ、ホントに？』

『おう、絶対にだ！ なにせ空はどこへだってつながっているからな』

それは、明日香に向けた言葉であり、俺自身にかけて言葉でもあったのだ。

浜辺を歩きながらスマホを取り出す。

『今日の海辺の空がすごい綺麗だった』

そんなメールを打ち、その光景を添付写真に収めようとレンズを向ける。その時、目を奪われた。

「飛ぶにゃーん」

長い髪がたなびいた。吹き付ける海風を切るようにして、少女が空へと舞い上がる。

遠目から見ても容姿が整っていることが分かった。

聞き覚えのないグラシユの起動キー、見覚えのない制服、見慣れない顔。

だが、だが、俺は彼女を知っている。

『……お前、名前は?』

もしかしたら、経験者かもしれない。

違うと思いつながら、俺はあの時、無理やり試合を切り上げた去り際、聞いたことがある。

少し変わったが聞き覚えのある声、そして、少し違和感こそあるものの、ギリギリの前傾姿勢があまりにも見覚えがありすぎた。

「まさか——ッ」

今の今まで、忘れていたはずの、彼女の名前が蘇る。

俺を負かし、挫折を与えて、消えていった本物の『天才』。

『——鳶沢。鳶沢みさき。なんかごめんね、下手なのに付き合ってもらって。あんまりにも綺麗に飛んでるからつい同じように飛びたくなっただんだ』

砂浜の少女との再会。

それは、中学に上がって一度目の夏のことだった。

砂浜の再会—2/2

体を捻り加速する。

放銃された弾丸のごとく、蒼の世界を貫くシルエットはあの時を思い出させる。

『うわあ、そんな飛び方もあるんだね。っと、これ、バランスとるのが難しいや』

記憶にある飛び方と多少変わりこそしたが、より滑らかな動きになっているのはその技を制御している証だ。

思い出すのは、俺を追い詰めてみせた原石とすら言える圧倒的な才能。

効率よりも使いやすさを突き詰めた、——人の技を掌握することに長けた天性の怪物。

俺が教わり、奪われた技術は、センスがあるのが前提として積み重ねた努力によつて効率性を突き詰めたものだった。

より早く、より高く。誰よりも彼方へ行くために、誰よりも正解だった葵さんを溶け込ませた模倣。

俺はその、溶け込んでいく感じが好きで、もつともつと進んで行こうと思えたが、彼女の——鳶沢みさきの根源は全く違ったものだった。

空を飛びたい。同じ気持ちでありながら、俺は最誰よりも強い飛び方強を目指し、鳶沢は最自分が楽で楽しめる飛び方高を選んだ。

今こうして改めて見てわかるのは、ブランクがあったとしても、今の俺でも勝てるくらいの実力。今まで思ってきた不安の正体がこうもあっさりと解消されては拍子抜けもいところだ。

だから、違和感が残る。

鳶沢みさきという人間の全部を分かったつもりになって決断を下すのは早すぎる。あの頃、急激な飛躍を果たした野良試合からほとんど成長が見られない——もつと言えば、掌握による改悪のせいで完璧だった飛び方が崩れて、弱くなったように感じた。

それは、可笑しなことだ。

あの時、俺が彼女に未来の俺の姿を見たのは、彼女が掌握したものが、思い描いていた理想通りの飛び方だったからだ。

変な癖も見当たらないし、あえて飛び方を変えているとも考えにくい。

何かが、可笑しい。

この胸のざわめきが示すのは一体何なのか。

もう、思い出したくなかった相手だったはずなのに。

彼女のことを気になって仕方ない。

ピロリン

『まーちゃん、宇宙人が！ 宇宙人が写り込んでます?!』

ピロリン

『おい、まーちゃん?』

ピロリン

『（。 ㇿ）まーちゃんに都合のいい女扱いされた……』

? ≡

「……やっぱ無理かー。ここに来たらもしかしたらって思ったんだけどなあ」

鳶沢みさきは覚えていた。

夏休みを利用して祖母の住まうこの島へ訪れる。

幼い頃から変わらない恒例行事だ。

その中でも、ひとつだけ、鮮明に記憶している出来事があった。

当時、四島は他県に先んじて実験的にグラシユ——反重力粒子を応用したアンチグラビトンシユーズを導入して、『空を飛べる島』として日本中の話題となっていた。

今でこそ地方都市でも空を移動することもできるが、しかしそれも決められたルートのみとなっている。四島のように停留所であればどこへでもいける、というわけにはいかないのだ。

空を飛んでみたい。祖母のことが好きだったのもあるが、買ってもらったばかりのグラシユを試すために早く四島へ行きたいと思ったものだ。

買ってもらったばかりの翼を持って、よくお母さんが連れて行ってくれた浜辺へ走り向かう。

そこで、みさきは出会った。

運命なんて大げさなものじゃないけれど、その出会いはみさきに対して大きな影響を

与えた。

FC。フライングサーカス。

先に空にいた子供が、まるでジェット機を思わせるように、空を飛ぶ。

水平に加速したかと思えば、急降下と急上昇を繰り返し、見ただけでワクワクするような飛び方だった。

『おーい！ おーい！』

大手を振りながら声を張った。

ちようど浜辺の辺りに近づいてきた頃で、その子は気がついたみたいで、

『どうした？』

降りてくる姿勢すら、かっこいいと感じるくらい興奮していた。

『それって面白いの？ やってみたいんだけど……』

『お願いだから飛ばさせてよ！』

『いいよ、これはフライングサーカスっていうんだ』

『ふらいんぐ……さーかす？』

『最高に面白いスポーツの名前！』

その記憶は、みさきがFCを始めることになる原点のようなものだ。

見ているだけで楽しかったし、真似するだけで嬉しくなった。

まるで空が自分だけの世界みたいに、必死になりながら、飛び回った。

だから、心残りがあるのは自分があの時引き止めた——今なお誰よりも綺麗な飛び方をしていてと思わされる髪の毛の長い子が、下手な自分と飛ぶことによつて急に怒つて帰つてしまったことだ。つまらないとまで言わせて、初心者だったからなんて言い訳しようとは考えられなかった。

あとで知ったことだが、その子はFCどころか世間では有名だったらしい。

聞くところによると世界大会で圧勝してしまえるほど実力が突出した選手で、二代目飛翔姫と呼ばれる同じ年のスターだった。

憧れた。日向晶也。驚くことに美少女だったと思つていた子が実は男の子だったなんて知り、密かに敗北感を覚えながらも、過去の試合で飛んでいる動画を探し出しては何度も繰り返し再生した。

夏休みも終わり四島を離れると、FCというものが途端に遠くなった。地域で活動しているクラブチームに入つてみても、日向晶也のようなドキドキするような飛び方には巡り会えなかった。

すぐにチームで一番強くなったけど、所詮は日向晶也の猿真似でしかなく、日が経つごとに夢の立会いの時のような飛び方はできなくなつていた。

動画を見てると思うのだ。

できれば、もっと横で見えていたかった。

過去のことをいつまでも引きずっても仕方がない。

だけど、まるで空の全てを操るような、あの時のドキドキするような体験をみさきは求めていた。

だから、期待した。

あの時、FCを始めてした場所で飛んだら、また思い出せるかもしれない。

綺麗で、早くて、かっこよくて。

最っ高に楽しかった空の記憶を、思い出せるかもしれない。

そう思い、中学に入って初めての夏、いつものように大好きな祖母の家を訪ねて、ぶらぶらしてると言って思い出の場所に足を運んだ。

けれど、分かったことは、望みはそう叶うものではないということ。

鳶沢みさきは、楽しかったことだけを覚えていた。

だから、『それ』は運命の訪れだと思った。

?
≡

「なあキミ、それっておもしろいのか？」

——やっぱり晶也は、リスキーなことするんだね。

心の何処かで。

知らない誰かが、そう言った。

完結記念！ すかさず設定資料大公開！

設定資料

日向晶也

ジュニア世界制覇

みさきが天才であると信じた。

なので現在、みさきを日本一の選手にするために計画している

みさきが一番になった時に復帰を決意

だが、立ちはだかったのは明日香という最上級の原石だった。

自分でラスボスを育てていくスタイル。

去年、無名で決勝まで勝ち上がり、みさきのセカンドをしているが顔バレしていない。
グラサンスタイル。

すでに明日香以外のコミュニティができている状態で、部長も覚醒一步手前

真白の家で二人きりで遊んだり、バイトもしている。

梨香が隣に越してきてからよく家族間の交流ができており、外堀が埋められつつある。

記憶の共有はない。

まーくん、鈴木院、さっちゃん、お姉さま、覆面ガール、ワンニヤンの匿名謎コミュニケーションができています。チャットのおフ会で繋がった。

久奈浜以外にも各校にヒロインがいる状態。

「……………俺は今もみさきのこと、怖いままだ」

←

『あたしは乾さんじゃないから分からないけど…………』

『…………あたしは今も乾さんのこと、怖いままだ』

明日香がみさきに問う

「思い出したんです、すべてを。楽しくて嬉しくて、幸せだった私も。辛くて悲しくて悔しくて、目の前にある幸せを掴み取れなかった私も。全部ぜんぶ、思い出しました」

「…………それで？」

「みさきちゃんもそうなんですよね？ 多少は筋書きが違ったところもあるけど…………み

さきちゃんはすべて分かった上で、書き換えたんだよね？」

「だつたらなに？」

「早い者勝ちが当然でしょ？ なんでわざわざ覚えてない人に譲る必要があるの？ 明

日香だって現にこうして動こうとしてる。文句を言われる筋合いは無いと思うけど？」

「——文句なんかありません」

「ただ……言わないといけないと思って」

「……なに？ 宣戦布告したかったの？」

「まーちゃんを、晶也くんを諦めてください」

「はあっ？」

「みさきちゃんも、全部の記憶を持つてるんですよね？」

「なら、比べて見てください。覚えてますよね、どの選択肢を選んだ晶也くんが、一番幸せそうにしていたのかを」

「みさきちゃんも、わかっているんですよ」

「莉佳ちゃんでも、真白ちゃんでもありません」

「そして、みさきちゃんでもないんです」

「……つうるさい！」

「わたしを選んだ晶也くんが、一番幸せそうに飛んでいたんです」

でもそいつはまーちゃんです……。

鳶沢みさき

一年生で大会準優勝記録をもつ超新星として知られる。

警戒されているので研究し尽くされ、晶也から戦術を教わったお姉さまに乾と同じように上を取られ覚醒する。

新妻気分で晶也の家にご飯を作りに通ったところ莉佳と修羅場に。

市ノ瀬莉佳

さつちゃんは反抗期と信じて疑わない。

約束は綺麗なまま大会で当たることに。

晶也と会って記憶をすべて取り戻し、すぐに外堀を埋めにかかる優等生

夜の会話でのパジャマも際どくして晶也を追い詰める

倉科明日香

晶也とは幼馴染・メル友

乙女ゲー主人公の素質を持っている魔性の女にして美少女ハーレムを築いた猛者。ハーレムメンバーは明日香が「まーちゃん」なるメル友に好意を寄せていることから百合なのだろうと思っていたが、明日香から真実を知らされ、さらに恋愛相談らしきメールが届いたことにより、メンバーたちには間男のまーちゃんとして認識される。

ほぼ原作通りの成長で、最後の選択肢（全部OK）で全て思い出し覚醒する。乾と同様に終わったことから一目置かれるようになり、乾が転校してくるきっかけになる

真白

唯一続きをもつモノ。奪われた時間を代償に

みさき（弱体化）に勝利する実力を引き継いだ強くてニューゲーマー。

高藤のレギュラーである市ノ瀬梨香と並ぶ実力で、原作開始前から仲良し。

梨香が昌也に対して重すぎる恋をしていると思っっている。

記憶を取り戻していないので晶也に対する好感度は特にない。が、不意に既視感を覚えたり、昌也が他の少女と仲を深めるのを見て胸に痛みを覚えたりする。

おまけ

佐藤麗華ルート

「ありがとうございました。あの時、明日香の提案を受けて野良試合する必要なんてなかったはずです。でも、砂糖院さんはあしらうでもなく、真摯に向き合ってくれた。FCを好きになってほしいと思っただけでできないはずですよ」

「よしてくださいます、私はお礼をされたくて、あの時、倉科明日香に付き合ってたわけではなくってよ。あと、佐藤院ですわ、さとーいん。さとーいん→ではありません。さとーいんですわ」

「……はい。でも、なんか「ありがとう」の意味を勘違いしてそうなんて言い直しますけど。俺の大好きなFCを、こんなにも好きでいてくれる人がいたのが嬉しかったんで

す」

「……ふん、そんなの当然のことですわ！ みんなFCが大好きだから、こうして全力で取り組んでいるの。あなたが知らないだけで、みんなFCのことが大好きなんですよ。」

「そうですね。みんな、FCが大好きだから真剣に取り組んでくれてるんだ」

「話は以上かしら？ でしたら失礼させてもらおうわね。ああ、そうでした、これ、今回のお裾分けですわ。佐藤院印の砂糖ですってよ？」

「院の字が見当たらないし、……やっぱり砂糖院さんじゃないか」